501
202

25. 8. 23

22916

501
202

501-202

東京大司教ペトロレイ出版認可

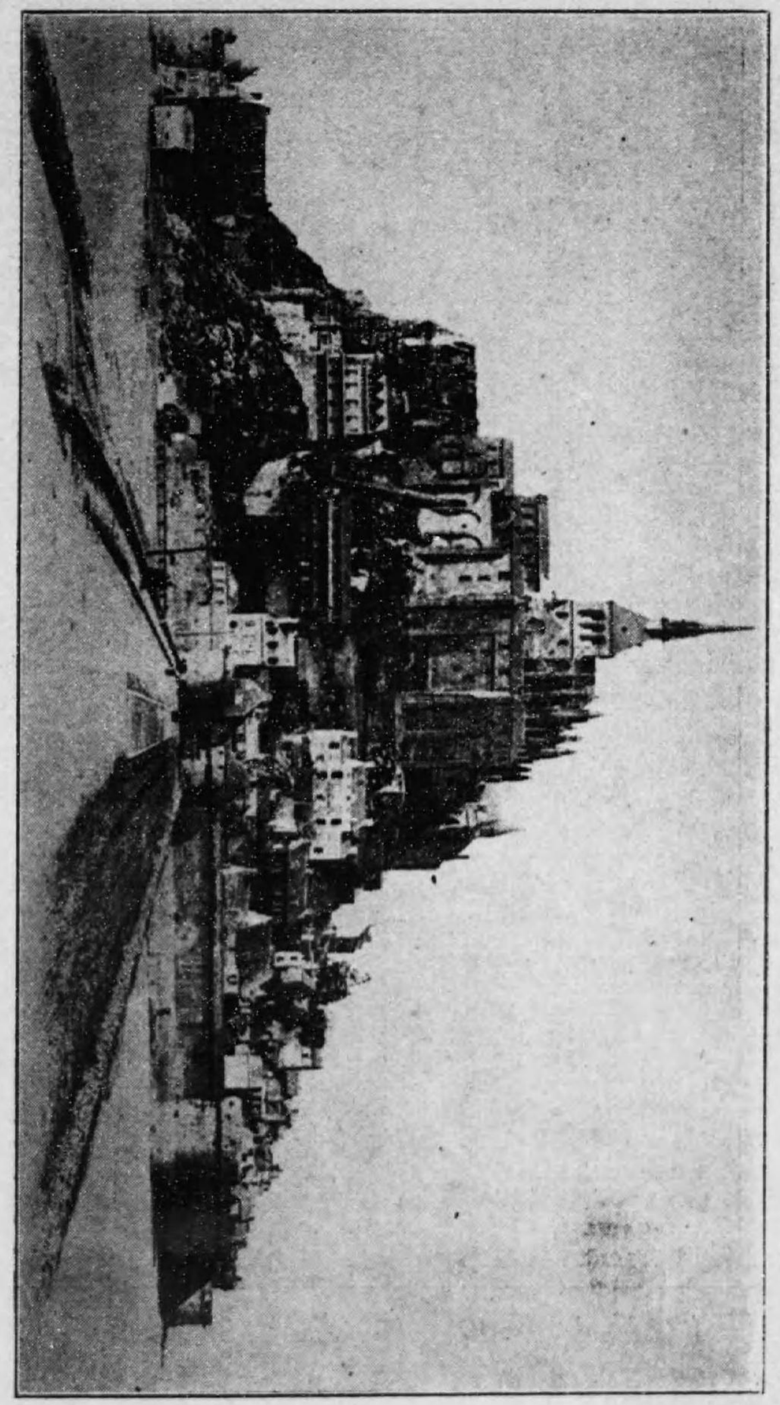
ドラポールト靈父作

史劇ジャンヌダルクの援助

教學研鑽和佛協會出版部

大正
10 11. 5
内交

（ジヤンヌダルクの天來の聲を聽く）



此寫眞は「ルーアン」の一部分です。此處はジャヌ、ダルクが生涯の最期を遂げた所であります。ルーアンは英國の領土であつた時分に、ジャヌ、ダルクが生涯の最期を遂げた所であります。

史劇ジヤヌダルクの援助目次

フランス國モン、セン、ミツシエルの場

第一幕（十二場）自三……至三〇
第二幕（八場）自三四……至五七
第三幕（十一場）自六八……至九五
第四幕（十五場）自九七……至一三一

ジヤヌダルク

ジヤヌダルクの名は世界の人口に膾炙し國の未開文明に係らず、眇たる此の一少女の名の知られない所は幾んど無い、曾に其名の聞えぬことのないばかりでなく、總ゆる女傑の中に彼女ほど識者の同情と惑嘆敬愛と崇拜とを以て迎へらるゝ者は蓋し他に其比を知らぬ。

凡敵味方の別なく斯の如くジヤヌダルクを賞讃する所以は、要するに彼女が人をして最も感動せしむべき多くの德を奇くも其一身に集めて居つたからであらう。

彼女は性快活にして機智に富み、毎に常識を離れず、處女の貞操に加ふるに武人の堪忍勇敢と、將帥の器量、統卒の經驗とを以てし、敵軍を敗りて祖國を累卵の危きより援けて其獨立を恢復し、國王を死地より救ふて王朝の寶冠を戴かしめ其功成るや輿國の救主として全佛國民の崇敬と榮譽とを一身に荷ひ、勳光赫々佛領全土を照した、されど彼女の運命は端なく一轉して、曾て其滅亡より救ひたる所の同胞によりて賣られ、縲絏の辱を受けつ、終には功あつて罪なき身が、衰れ敵軍嘲笑罵詈の間に火刑に處せらゝるの最期を遂げた。

然しながら彼女は順境にありては其榮譽に誇らず、逆境に際しても悲運薄幸に失望せず、殆ど幸不幸、名譽不名譽を眼中に置かざるが如く從容として其自ら使命と信じたる所を遂行して他を顧慮するの暇なく吾人が想像し得らるゝ最高の理想を實現し得たのは驚く可き事實ではあるまいか。

世の數多の歴史家が彼女の事蹟を著述して賞讃の辭措く能はず、詩人は其詩に於て、畫家、彫刻家は其作品に於て、あらゆる藝術が彼女の超人的功業を永久に殘さんとして吸々たる決して偶然のことではない。歐州の文學に精通せらるゝも識者はジヤンの生涯を題目とする歌劇の類の如何に夥多なるかを知り給ふならん。其生國たる佛國の文學は云ふに及ばず英獨の文學にさへジヤンの名を見る事稀ならざるは彼の有名なる

詩聖シルレルの「ヲルレアンの少女」又麗しきサウゼイの詩を見ても明である。繪畫に於てはボールドラロッシュ、デベリヤ（アンジエ博物館）イングル、新らしくはバスチアレルバージ彫刻としてゴアマリードレアン（ルーブルにあり）ルード（ルクサンブール博物館）フヲヤチエ（ヲレアン市）シャビユ（ルクサンブール）ブレミエ（巴里）ルフーブル、の作等擧て數ふ可らず、若しそれ傳記歴史批評の類に至りては實に汗牛充棟も啻ならぬのである。

一言にして盡せば彼女は實に婦德の龜鑑として將た武勇の模範として熱誠、敬虔の師表として其名を萬世に傳へらる可き德表的女丈夫たるは爭ふ可からざる事實である。

史劇 ジヤンヌダルクの援助

ドラボルト作

登場人名

ルイ・デスツウトビル・ドスボウの領主、モン・セン・ミシエルの司令官 D'Estouteville
ミシエル・デスツウトビル・その長子、十六歳 Michel D'Estouteville
ドム・ジヤン・ゴノウ・モン・セン・ミシエルの修院長 Dom Jean Gonault
ジヤン・ペイネル・騎士・デスツウトビルの副官 Jean Paynel
ラウルケン・ド・クレキイ Raoulquin de Créquy
ジヤン・ド・ブレオテ Jean de Bréauté
リシヤール・ド・クレンシヤン Richard de Clinchamp
ギヨーム・ド・ベルダン Guillaume de Verdun
ルイ・ベ・フオリニイ Louis de Folligny
騎士

ギヨーム●ド●ラモルシエール●ド●ヴキック●老騎士 Guillaume de Lamoricière

ジエオフロア●ド●ボウヴアール●雇傭弓手隊長 Geoffroy de Beauvoir

ジエラール●ド●ヴオーセル●十八歳 Gérard de Vauceller

ロード●シイモア●ソマアセットの副官●トムプレースの知事 Lord Seymour

騎手、若干

弓手、若干

兵士、英佛共多數

場所 フランス國、モン、セン、ミシエル

時 西暦一千四百三十四年六月、十五、十六、十七日

第一幕

守備兵控室、奥の方に大きな爐、右手、奥、階上へ通ずる石段、その前に柱——左手、奥に窓（格子を入れたる）その上にも圓窓、海に面す——窓と舞臺前景との間に、扉階下へ降る石段、壁に武器懸る、彫刻ある木製の椅子數脚——モン●セン●ミシエルの大旗、白地に三つ白合花と小貝十個をあしらへる盾を打出す、その下にクイス●ウト●デウスと縫取りあり

第一場

ラモルシエール。ミシエル。ジエラール。修院長

ジエ（右手に座せるラモに向ひ）おゝフランス、私の胸は躍る。話して下さい、その名譽のある歴史を

ミシエ院（窓にもたれしを離れ來る）その戰と立派な理想のお話をして下さい

ラモ院（右手石段を下りて來る）話してやるがい、われわれの王と英雄の聖人のことを

何とい：立派な役割だつたらう、さうしてその手柄の美しかつたこと

（前に出る）このフランスの子供達のためにはアクチウムの勝利者が何だらう、數多いシーザアを有したローマもレオニダスとスパルタもこのフランス

の未來の兵士にとつては何だらう、彼らは塵の中に眠つてゐればいゝのだ

ジエ　私達の國にも勇しい兵士がゐるのでせうね

院　ラモルシエール、君の力は三十年以來一度も摧けたことはなかつた、セン、ミシエルの勇士

ラモ　わしも年をとつたなあ……だが最後の時が來る前にお前達に昔のフランスを話して置かう——（起ち上る）——よく聽いて置けよ、我らの歴史は尊い尊い頁を有つてゐるのだ。トルビアックタイユブール。十字軍。ブウビーヌ。——

院　あゝ何といふ立派な名前だらう、これがお前らの先祖が書いた美しい頁だ

ラモ　さうして天主樣は彼らに光榮を與へ給うたのだ

キリストの御榮の爲めに軍旗を高くかゝげよう、恥づる所なく十字の印をつけよう、キリストは我らの爲めに戰つて下さるのだ然し天主を罵る時、吾が國は天主の爲めにその劍を折られてしまふ、その勝利の夢も束の間だ、天主に逆へばその助けを望まれない。

院　（ジエラ。ミシエ。に向ひ）お前方はまだ戰つたことも苦しんだこともない、聖ミカエルはいつもお前方を守護して下さる、暴風雨さへどうすることも出來ない岩の上にお前方は罪惡の血を見ずに安らかに暮してゐるのだ、

ラモ　お前達は知るまい、先頃迄は幾度か裏切の手が我われの幸福も我々の町をも敵の手に渡した、わしらは祖國の小さい部分、又は王の影を守ることさへがやつとだつた、陰謀と恐れと不和と憎みとが……

ジエ　（烈しく）でも、男爵、その時ではありませんか、ロレーヌから出た少女が多くの奇蹟を現して王樣を位に即かせたり吾が國を恢復したのは

ラモ　（熱心になる）ジャンダルク、ジャンダルク……失望に項垂れた我われの額に潔い手で「希望を持て、明日だと」印したのはジャンヌだつた、お前方も信仰と名譽心とを失はずにその跡を履んで行くなら勇氣は胸に充ち滿ちて來るだらう、心をいつも潔く……潔白な者ほど強い者はないよ

院　（右手石段の方に行く）おや何の音だらう

ミシエ　敵？……暴風？

ジエ　（窓に行く）いや愉快さうな角笛と喇叭の音だ、狩獵の歌だ

（角笛の音聞ゆ）

ミシエ　戰爭の合圖は何時だらうね

（二人窓による）

第二場　以上の人物の外ボウヴアール。ブレオラ。フオリニイ。弓手、若干

院　（ボウの下りて來るに向ひ）ボウヴアールさん、どちらへ

ボウ　（舞臺の中央に來て）向ふへ、モンドルの森へ、海岸の……狩獵にですよ

院　こんな霧に、海が鳴つてるぢやありませんか

ボウ　（石段に立てる弓手に）構ふことはない、さあ角笛を吹いた、風の聲に答へてやれ

ラモ　トムブレーヌの周圍は上げ潮で白い波が立つて居る、荒馬のやうに泡を吹いて叫び狂つてゐるのに

院　（ボウに）あなたはこわくはないのですか

ボウ　私が――いゝや、

ラモ　イギリス兵も

ボウ　奴らはアヴランシユの露營でちゞこまつて寢てるでせうよ

ラモ　眠りながら考へてゐるのだ

ボウ　何を

ラモ　復讐をさ、二十五年の間の恥を雪がうと思つて――さうして君は

ボウ　（笑ひながら）わしは狩のことを考へてゐるのだ、危險のことなんかさつぱり

院　ボウヴアールさん

ボウ　（愉快さうに）鹿や野猪は海岸の松原の陰に氣持よさゝうに寢てゐます、どりや槍の先きで一寸眼をさましてやるかな

ブレ　さあ狩にだ

フオ　さあ吹いた角笛を

ボウ　（ラモに）行つて參ります

左手の階段に行く、ブレ。フオ。弓手も之にならふ、――角笛の音急に止むペイ出る

ボウ　（ふりかへる）ペイネル！

第三場

ペイ　（石段の上より、手に羊皮紙を持つ）しばらくボウヴオアールフオリニイ。ブレオーテエ。司令官の命令だ

ボウ　（皮肉さうに）や、これは

ペイ　デスッウビルとちやんと署名のある命令だ

ブレ　命令ですつて

フオリ

ペイ　城門は直ぐ閉ろ、橋を上げろ、城壁を警戒しろ、皆見張りに出ろ――かう書いてある

ボウ　然しわしは出掛けよう

ペイ　ボウヴアール？

ボウ　默れ

ペイ　なに默れと

ボウ　いかにも。その命令が癪にさはる。お前の主人はな、わしらを繩でしばつてるのだ、丁度狩犬のやうに。イギリス兵が見えると――夢にでもな――司令官はすぐわしらを外へ出すまいとするわしは三月以來一足だつて海岸の砂をふんだことはない。もう澤山だ、堪らなくなつて來た

（ブレ。フオリに向ひ）

どりや出掛けようか

ブレ　デストビルの命令ですよ

ボウ　それがどうしたといふのだ

ブレ　止めよう

ボウ　フオリニイ、君は

フオリ　（プレと囁く）僕はこゝにゐる

ボウ　（激怒する）勝手にしろ、犬めら、デストビルの周圍に飛びつけ、じやれろ、側にくつついてろ、さうすりや主人は安心して眠るだらう――さうして月が出たら吠ろ、傭兵の犬め

プレ　ボウヴアール、云ひ過ぎるぞ

ボウ　おい

フオリ　氣をつけて物を云へ

ボウ　あつちへ行つて口輪をはめて貰つて來い

院　（ボウに）もしも危急なことが……

ボウ　自分の義務をつくすべき時にはちやんと歸りますよ、御安心なさい、では行つてまいります

（弓手を引連れ左手の石段より出る）

第四場

ラモ　海岸では敵が間がな隙がなこつちの弱味をねらつてゐるのに自分の樂しみとは云へ危地に陷るやうなことをするなんて無茶も甚しい、それとも何か卑しい下心でもあつてのことかしら

院　（ジエ。ミシエに）樂しみを求めてゐては勝てるものではない

ラモ　（騎士らに）現在敵が間近く押寄せてゐるのに勝手極る遊びに出かけるのは裏切とは云へないだらうか――（間）――とんだくちをこぼして失敬、年を取つてはだめだね、さあ諸君支度をし給へ

プレ　（笑ひながら）狩にですかね

ラモ　（力をいれて）うむ、イギリス兵の狩に！

第五場

ボウ　（入り來る、怒りてペイに）副官、司令はうまいよ懸金は新しいし扉は嚴重だし此處の鐵格子は丈夫ですね！檻！これが勇士の住居だらうか、我われを猛

獸のやうに取扱ふ氣かしら

ラモ　(靜に)要心は勝利の姉妹だ

ボウ　(皮肉に)お說敎はいゝ可減にした方がいゝだらう

ラモ　おい！

ボウ　(毒々しく)年寄の冷水か

ラモ　無禮者！

ボウ　(劒を拔く)無禮者だと

ブレ　(急ぎすゝむ)まあ〳〵年寄のことだから

ボウ　ぢや彼奴もお說敎を控えたがいゝ

ペイ　(進み出る)老人に刀を拔いてかゝるなんて

ボウ　よぼよぼめ、指の先で觸つてさへ仆れてしまふくせに

ジエラ　(ラモを圍ひ、ボウに)引込め

ミシユ

ボウ　(激怒して劍をふりあげる)おいぼれ、小供に圍つて貰ふ氣か

(ジエラ進む)

ジエラ　貴樣何だ、何といふ奴だ

ボウ　ジエラールです

ジエ　(輕蔑して)ジエラール！町人の倅め！

院　あなたと同じやうに貴族です

ジエ　(ボウに)隊長、孤兒です

(ボウに、强く)私の先祖はあなたに劣らないのです、そうして私の父を、あなたは……

ラモ　ジエラール、落付いてな

ボウ　(ラモに、怒りて)それが氣にくはないのだ——(ジエに)今度出しやばると……

院　(ボウに)此處は聖い所です、汚して下さいますな

ペイ　ボウヴアール、聖ミカエルの名によつて、劒をすて給へ

ボウ　さあ取れ

院　行つてみよう

（ペイ劒を拾ふ、――ポウ石段の方に走り行く）

（院、ペイ。ブレ。フオリ。弓手ら出る）

第六場

ミシエ　なんだ、騎士にふさはしくない舉動じやないか

ジエ　何といふことだらう

ラモ　珍らしいことぢやあない、十ケ月以前あの男がこゝに來てからあの度し難い傲慢な烈しい心は司令官に反抗し、兵士を煽動し、大膽極る言辯を弄してゐる、たつたあれしきの助力に、われわれは高い價を拂つてゐるものだ

ミッエ　ではなぜ味方にして置くのですか、お父様の權威はどうなつてしまふのでせう

ラモ　あゝ、何より數だよ……お前のお父さんはよく知つてる、こんな狹い城塞の中に引籠つて、少數であの陸にみちたイギリスの大軍を防ぐには一人の兵士

が三十人に相當するのだよ

ミシエ　聖ミカエルもジヤンダルクも天主様も私達の味方ではありませんか

ラモ　（笑ふ）さうしてお前でな

ジエラ　あゝどうぞジヤンダルクのことを話して下さい、思ひ出すだけでも胸が躍るやうです、私達を數へて下さい、私達は吾國の未來なのです

ミシエ　イギリス人はまだジヤンダルクの名を聞いて慄へてゐるのでせう

ジユ　ジヤンダルクは貴族だつたのでせうか、學者だつたのでせうか

ミシエ　ジヤンダルクのあの勇氣は何處から來たのでせうね

ラモ　ジヤンヌはたゞの田舍娘だつた、それでゐて王様の妃よりも氣高い心を持つてゐた、家は貧しかつた、文字さへろくに習はなかつた、ジヤンヌの知つてゐたことは羊を飼ふことゝ糸を紡ぐことゝ裁縫をすることだけだつた――學問もよいことだ、天主様は學者を祝福して下さる、修院にも學者が澤山ゐる、然し天主様はその御力を示される時は好んで弱い者を、お選びになる、汚れ

ない者に力を與へ給ふのだ、ジャンは謙遜で潔白だつたから天主樣に招かれたのだ、そうして天主の聲を聞いた時ジャンは躊躇せずにすぐその召しに從つて至る所に勇氣と希望とを起させた、我われに王を與へたのもジャンのお蔭だ

ミシエ　私達には王も貴族も軍隊もなかつたのですか

ラモ　國は四方を取卷かれ、イサボウの如き奴等に賣られて四分五裂の有樣だつた

ジエ　ヂユノアとかイールとかいふ大名はどうしたのでせう

ラモ　吾國に王がゐない時はもうおしまひだ

（熱して來る）

然したうとうやつて來た天主の祝福を受けた、ジャンダルクが……黑い馬に跨り白い鎧をつけて疾風のやうにイギリス兵をオルレアンに蹴散し、なだれのやうに敵軍の上に殺到したのだ、あの聖い旗をふりかざし、劍を閃めかして祖國を恢復したのだ、そうしてレンスで皇太子を正統な位に即けたのだ、——

あゝその光景をわしは眼の前に見るやうだ、わしはあの旗の下にゐた、我國は墓の中から甦つたやうだつた——（間）——あゝ何といふ美しい光景だつたらう

ミシエ　萬歲

ジエラ　萬歲

ラモ　よく覺えて居るのだよ、我國はいつもこんなだつた、外敵の侵入を受けて國內はふみにぢられる時、祭壇の前に跪いて心から悔いると必ず神は英雄を降して我國を救つて下さるのだ、……さうして先頃、天主樣が降し給うた勇士といふのは……小さな娘だつた、

ジエラ　それをイギリス人は火焙にしたのですね

ミシエ　あゝ何といふ大罪惡、大破廉恥なことでせう

ラモ　（力をいれる）何といふ光榮だらう……オルレアン。ボウジアンシー。數へ上げれば幾多の功績があの薪の焰に映えて一層美しさを增して照り輝いたのだ、王の座もジャンヌにはあまり小さい、——ジャンヌが薪の山に上つた時、

あゝ美しかつた――(間)――十字架に接吻してお祈りをした、涙が流れた、眠をあげてイエズス様と呼んだ、忽ち火と煙に裡まれてしまつた、イエズス、イエズスと火で書いた文字が現はれたさうだ、そうして柱がくづれ落ちた時一羽の鳩がつばさを展げて飛び出したと傳へられてる

ミシエ　お、我國の救主

ラモ　お前方もジャンヌのやうに本當のフランス人になるのだぞ

ジエラ　イギリス兵め滅びてしまへ

ミシエ　(熱心に)どうぞこのモン・セン・ミシエルが聖ミカエルの御守護によつてあくまでもフランス領でありますように

デス

第七場

(弓手數名、次いでデストビル石段を下り入り來る、弓手ら奥の方に列ぶ)ミシエル、よく云つた、それでこそお前の父にふさはしい子だ、お前の胸にはわしの心が胸をうち初めたのだ(ラモに向ひ)男爵、君の教訓に御禮申します

ラモ　私はもう華々しい戰には臨まれませぬ、心ばかり急いても力がない、然し劍は思ふやうに持てなくともこの子供らを勵ますだけの言葉はあります

デス　あゝこんな不仕合な世にめぐり合せても自分たちの周りにこのやうな若い者がゐるといふのは何といふ慰めだらう、わが身の春は過ぎてもまた花の咲くのを見るやうだ、わしらは死んでもいゝ、子供らが皆仕事をやつてくれるから

ミシエ　死ぬ、いゝえ、子供たちは父の傍についてゐたいのです、そんなに早く死んではいやです、私はいつまでもお父様のそばで戰ひたいのです、明日にでもお許しさへあればジエラールと一緒にお父様の前で巢立をしてお目にかけませう

デス　明日？そうなるかも解らぬな

ジエラ　(懇願する)司令官

デス　では二人ともしつかり初陣の手柄を立てるがいゝ

院　（入る、前にすゝみ）武勇の天使聖ミカエルの御守護が二人の上にあるように

デス　そうだ、一人でも守備兵を多くしたい、敵兵は益々増してくる勢は侮りがたくなつて來た

ラモ　二萬とかいふ話だ

デス　我われは八百足らず

ジエラ　天主様のお助けさへあれば勝利は疑ひありません

院　數の多い方が勝つた例はないからね

ラモ　一度だつてない

ジエラ　イギリス兵を思ふ存分なぎ仆して、あとでゆつくり勘定でもしよう

ミシエ　（ジエラに）さあ行かうよ

（ミシエ。ジエラ。ラモ。右手石段を上りかけ、また引返して左の石段を下りて出る）

第八場

デス　わしはあの孤兒が好きだ、ミシエルは兄弟のやうに思つてゐる——火に包まれた城の中から修道士に救ひ出されたのださうな——行末の頼もしい子だ

ラモ　確に、先祖の名をあげることでせう

院　ジエラールの知らないその父とかいふ人はイギリス兵を散々に切り殺してついに捕虜になつたとかいふ話だが

ラモ　その子は父の名に恥ぢないことをするでせう、われわれにとつて一人の味方がふえたわけですな

デス　（暫時思ひ入る）味方！それが何より緊急なのだ、こんな離れ岩の上に孤立してゐる我われを誰が救ひに來てくれるだらう

ラモ　シャル、七世陛下とリシユモンド

デス　そんなことが出來るだらうか、王はわれわれの苦境をご存じだらうか、王にはこんなちつぽけな島が何になるだらう、助けようと思つても出來はすまい、王は恢復された領土を守るにさへ骨が折れるのだ、然しこのノルマンヂーを

どうなさる積りだらう、ブルタアニュに立て籠つてるリシュモンドさへわれわれに應援の兵を送り兼ねてるのに――（間）――わしらは全く孤立だ向ふの岸を見給へ、百艘以上の軍艦が白い帆をあげて碇泊してゐる

ラモ　あなたは恐ろしいのですか

デス　何で恐ろしいことがあらう、わしは待つてるのだ

ラモ　モン●セン●ミシエルは百年の間抵抗を續けて來たのだ、そうしてわしらの祖先は……

デス　彼らのやうに勝利者でありたい、忠義でありたい、そうしていつもフランス人でありたい――（間）――然し我我の中に不和をかもす者が出て來た

院　（窓より離れ）赦しておやりなさい

デス　あの男ですか、傲慢な惡賢い喧嘩好きな、あの火のやうな男をですか、沈みかけた船には氣狂は無用だ

ラモ　あの高言は實に耳ざはりだ

院　赦しておやりなさい

（ボウ右手石段を上りて來る）

デス　（思案して）行狀を改めるか、さもなくば改めさすか

ラモ　手荒なことをすると却つてしくぢりますぞ

デス　それもさうだ……然し萬一の場合には目にもの見せてやらう

第九場

ボウ　（急ぎ足に入る）司令官

デス　やあ、ボウヴアールか

ボウ　さうです、私です、私は惡うございました、あなたの御處分に委せます――あなたと一緒に、あなたの傍にゐることを許して下さいますか

ラモ　（力をこめて）自分の過ちは償はせるがいゝ、身分を忘れて……

院　軍旗に手向ふ者を打懲すか、又はその下で討死するかだ――（司令官に）――ボウヴアールは後悔してるのですよ（奥に行きラモと談る）

デス　後悔だけでは足りない、口先きでは何とでも云へる、あんな言葉を使ひ、あんな所業をした以上は……ボウヴアールもなかなか口は行ける方だな、それも天分の一つだらう

ボウ　(そり返つて)多分さうでせう、然し司令、その代りに默ることも知つてゐます

デス　先刻此處で年寄に向つて劒をふり上げたといふぢやあないか、皆知つてるぞ

ボウ　氣が顚倒してしまつたのです、誠に殘念なことをしました――(烈しく)――あの老人の說敎で怒らない人があるでせうか、どんな……

デス　(遮る)もういゝ、もういゝ

ボウ　思はず知らず手が辷つて

デス　それで

ボウ　(ためらふ)時が來ます、私の劒を返して下さい、私は……

デス　その劒はフランスの爲めに役に立つだらうか

(ボウ考へ沈む、頭垂れる)

ラモ　(石段を下りて來る)司令官、彼を信じて下さい

デス　(ボウに)お前の名にかけてわしはお前を信じよう、わしはお前の武勇を知つてる、ソマアセットの陣中に一度ならず二度までも躍り込んだ勇氣は、城中誰知らぬ者はない。奴らをトムブレーヌまで追ひ返へしたことをわしは決して忘れない、なあ君も覺えてゐるだらう、えゝ?

ボウ　(己を抑へて)私は誓ひます

デス　その後悔を手柄でもつて證明してくれ給へ

(院、ラモの方に行く)

ボウ　(一人、前にすゝみ)これほどにまでおれを追ひつめてさげすむ氣か――えゝくやしい

第十場

ペイ　(石段の上より)皆出ろ出ろ

騎士達　（右手階段に行く）出て出ろ出ろ

デス　（窓に行く）敵だ

クレ　（下りて來る）イギリス兵だ

ペイ　（デスの傍にて）帆を一杯張つてあの眠つてるやうに靜な海峽から此方へ押寄せて來る

デス　さあ來たぞ

騎士達　（舞臺の上の）來たぞ

騎士　（石段の上より）用心しろ

弓手　少くも二百艘だ

クレ　海を掩うて押寄せて來た

キイ　響鐘を鳴らせ、わしらはすぐ城壁の上に——さあ皆來た、ブイオーテエ。クレキイ。ベルダン。クレンシャン——（各部隊に指圖する）——その部隊は城門、それは塔に、——フオリニイ、君は墻壁に

（皆々左の石段を降りて出る）

ミシエ　（ジエラと共に走り出る、各々手に抜劍）お呼びですか

デス　さあ行つた、ジエラールも御國の爲だ

ミシエ　あゝうれしい

ジエラ　お願ひです、たつた一言

デス　何だ、早く

ジエラ　我々の軍旗のそばに、一番高い城の上に旗を出さして下さい

デス　何の旗を

ジエラ　ジャンダルクが敵と戰つた時に持つてゐたのと同じやうなのを

ミシエ　あの勝利の前徵、敵にいつも怖れと混亂とを與る……

デス　どうか同じやうなことが現はれて呉れゝばいゝ、あゝジャンダルク——さあ行けその旗をかざして——我が味方の勝利になつたら明日二人を騎士にしてやらう

（ジエラ。ミシエ。次で院。ラモ右石段を上り出る、舞臺にはデス。ボウ二人、窓近く海を見詰める）

デス　ボウヴオアール、いゝ機會だな

ボウ　司令、用意は出來てゐます、さあ參りませう、私は時機を窺つてゐたのです

デス　機會を探してゐました、丁度やつて來たのです

（出ながら）司令官は君をたよりにしてゐる、君の弓手にも……第三番塔に、急いで

ボウ　ちやあ行つて參ります

（一二段の石段を上りまた引返す）

第十一場

ボウ　（一人、心いら立てる態、窓に行きまた前に來る）あゝ苦しい、いゝ加減におれの運命も片がついていゝんだ……もしイギリス兵が勝てばおれはもう自由だ、明日、今晩にもおれは自分の領地に歸る。そうして明日からは平和に、無事に暮すのだ……平和に！このおれが、この地上で！いやいや、おれはフランスを逃げ出したのだ、然しイギリスは大嫌ひだ、イギリスを憎んでゐるのだ、そうしてイギリスに仕へてゐるのだ……運命はもう極つてしまつた、イギリス人はおれに自由と平和を約束したぢやないか、奴らが勝てばおれは助かるのだ、……えい、こんな卑劣な芝居を仕組むなんて……いやだ、いやだ生きてる氣がしない、もうどうでもいゝ……あれあれ向ふに

（石段を上り左の方に行かうとする、ミシエ。ジエラ同時に右の方より旗を持ちて現る、背後に院、ラモ）

ジエラ　（段の上より）一寸、待つて、ボウヴアールさん

ボウ　なに待てと

ミシエ　ご一緒にまいりませう

（皆々舞臺を横切り左手より出る）

ラモ　（石段を下りながら海の方を眺める）そらあそこに

院　聖ミカエル、あなたの劍を以て彼らを打倒し給へ

（二人下りて舞臺に立つ）

ラモ　おや、あの音は

（雷鳴、電光）

院　（窓に行く）稲光！

ラモ　何といふ音だらう——（間）——

院　風が出て來た、海が白く泡立つて來た——おゝ來てごらんなさい

ラモ　風もこつちに味方をするのだ

院　波が高く激しくなつて來た、船が岸の方へ吹きとばされて行く

（電光、遠雷の音）

倒れかけた帆柱からぼろぼろになつた帆が千切れて飛んで行く

ラモ　その帆柱の上に鴎が翔んでゐる

院　難波船に獲物を探しに行くのだらう

ペイ　（騙けつける）皆滅茶々々になつてしまつた、風が仕事を引受けてくれたのだ

ブレ　（いそぎ入る）何も殘つてゐない、たゞ波間に木片がたゞよつてゐるばかりだ

ヂエ　（出てくる）早かつたね

ボウ　（下りて來る）不思議な勝利だ

（騎士、弓手多勢入る）

デン　勝つた、勝つた、聖ミカエル萬歳

皆　（劍をあげる）大勝利、萬ざい

デス　あの海賊共め、波にかくれて不意打をしかけまいとも限らぬ、用心が肝要だ

ボウ　（ひとり、左前方に）えらい勇士もあつたものだ、さつきの態は何だ、熱病にでもとつつかれたやうに震へてゐたくせに、勝手にしろ

院　聖ミカエルは幾度ともなくわしらを助けて下すつた、大海も暴風もあの聲に從ふのだ

デス　我々は聖ミカエルの光榮の爲めに戰ふのだ、それで聖ミカエルもわしらの爲めに働いて下さるのだ

クレ　奴らは大失敗だ

クレン　一度あつたことは二度あるよ

デス　さうだ、海からも陸からもまた押寄せて來るだらう、ロード、スケールス、もトムブレーヌの知事――（トムブレーヌの方を指す）――ソマアセットもきつと復讐を夢みてゐるにちがひない、油斷のないように

ペイ　（窓際で）もう風も落ちてしまつた、波の音も聞えなくなつた、銀のやうな波頭が碧い海の上に頽れてゐるばかりだ

ブレ　何といふ好い天氣だらう

フオリ　（ボウの思ひ込んでるのを指して）ボウヴアールだけ元氣がないぞ

ボウ　（稍ためらふ、不機嫌さうに）おれか、當り前さ、折角の機會を失くしてしまつてな

クレン　あの負けやうと云つたらないぢやあないか

ボウ　勝利者は暴風さ

クレ　（陽氣に）見上げた御心配だ、暴風萬歳、お天氣萬歳だ

デス　平和の時には樂く暮さうぢやあないか、明日の朝までお祝ひをしよう、だが油斷してはならないことを知らせる爲めに鐘の音と一緒に大砲を打つてくれ

院　騎士諸君、大に謝しませう、あたりに響くテ、デオムを歌ひませう、イギリス人もそれを聞いてあとで今日の戰を思ひ出すやうに

騎士皆　（劒をふりあげ）萬歳

（右手石段より出る）

デス　（ミシエ。ジエラに）約束通り明日から二人の騎士を仲間に加へてやらう、儀式は明日だ

院　二人とも今夜は祭壇の前で一晩中お祈りをするのだ

ミシエ
ジエラ　天主樣萬歳！（幕）

第二幕

天守閣入口の巡羅道――右手、奥の中程まで狹間ある塔――左手、奥の方より海を見渡す、狹間ある側壁、突出せる小塔――腰掛、石造の卓

第一場　弓手二人、石卓を圍みて勝負を續ける

弓甲　運が惡いなあ

弓乙　六と五か

甲　三と四で

乙　負けだな

甲　また負けてやるか、昨日のイギリス人のやうに

（賽を振る）

乙　兩方とも一か、緣起の惡い

甲　おい此度の分捕物の分前を賭けるか

乙　半分賭けようか殘りの半分でもありあまる程だらう

甲　うまいもんだね五と六だよ

乙　運に見離されちやつた、一と三だ――（賽を卓上に放り出す）――胸くその惡い勝負事だ、この次は……

（喇叭鳴る）

集れだ

（弓甲、弓乙出る、ジエラ、ミシエ喇叭の鳴る前に奥の手より入る）

第二場

ジエ　昨夜御堂の中で過した夜は實によかつたね、あの祭壇の前で僕らはもうぢき誓を立てるのだ

ミシエ　（だんだん熱して行く）下の方では波の音が聞えて上の方を見ると星空がひろ

がつてゐたし、前には天主樣が聖櫃の中にかくれてゐらしつた、あの石段に跪づいてゐた僕は何だか非常に小さい者のやうに見えちやつた、そうしてその天主樣の騎士になることを約束したんだ、敎會の勇士、國王の兵士になることを――あゝ何といふ夜だつたらう、……君と僕とは戰友になつたのだね……いつそれが本當になつて現はれるのだらうね――（間）――おや泣いてゐるの？

ジエラ　僕は君の嬉びに心から感謝するよ、然し僕は昨夜泣き通した

ミシエ　どうしてさう悲しいの、何か恐ろしいことでもあるの、キリスト樣の兵士になつて年齡よりも早く騎士になつたのだから君は潔よく命をなげ出して王樣の爲めに盡すだけぢあないか、何故泣くの、ジエラール、そんな年をして泣くものぢやないよ

ジエラ　僕は自分が悲しくなつて來たのだ――（間）――僕は家來も名もない孤兒だ、こゝの騎士のうちで幾人僕の名を知つてる人がゐるだらう、三人か、四人か……この日毎に繰り返へす激しい戰の中に僕の名がどれほど注目をひくだろう……ヴオーセル家の先祖はあの騎士達のやうに勇敢だつた、だからその後繼者も豪くなくてはならない、所がこの大任を負はされた後繼者といふのは修院の中でこんなに泣いてる子供に過ぎないのだ、通りがかりの人に救はれた棄兒に過ぎないのだ

ミシエ　ジエラール

ジエ　僕は自分の忠誠と血とを捧げよう、然し僕みたいな者の献物が何になるだろう

ミシエ　君の魂が立派ならそれでいゝのだよ、ねえ僕は君よりも豪い所があるのかしら、この身にあまる名譽に相當してるだらうか

ジエラ　君にはお父樣が隨いてゐらつしやる、君の小さい時から好きだつたお父樣が……我われの愛してゐる模範的の武士たるお父樣が

ミシエ　君は妬むでるのだね

ジエラ　いゝや、さうぢあない、然し僕は不幸なのだ

ミシエ　天主様が聽いてゐらつしやるよ、そんな女々しい愚痴はお嫌ひだよ

ジエラ　あゝもしお父様が生きておいでだつたら……さうして立派な男らしい、お手本を示して下さるなら新らしい騎士としての僕はたゞ眞直にどこ迄もお父様の通りに進んで行けばいゝのだ、さうすれば僕はすぐ一人前の騎士になれるのだらう、生甲斐のある日が送れるのだらう、所が僕が通ると皆、指をさして孤兒がと云ふのだ

ミシエ　ジエラール、君のお父様はフランスを愛してゐたんだよ、その爲めに戰つて領地も命さへも投げすてたのぢあないか、君もそれにならつて立派なフランス人になり給へ、ね

ジエラ　あゝ、もし僕の眼の前にお父様がゐられたら……もし僕のお母様がゐらしつたら……お母様は僕をさぞ可愛がつて下さるだらう、そうしてその胸に僕の額を引きよせて、お前は騎士にして頂いたさうだが私はお前を勇士にしてあげよう、と云つて下さるだらうに——（間、椅子に腰を下ろす）——孤兒、貧乏人、名もない人間！

ミシエ　でも君の愛してるジャンダルクは矢張り貧しかつたよ、誰れも知らない、無學な子供だつたがその名は今世間では皆知つてゐる、人が尊敬されるのはその魂によつてだよ、——どんな人をキリスト様は天主の兵士として選びなさるのだらういつもいやしい、小さな者ぢやないかしら、それでもジャンは國を取返し自分は天國の樂を得たぢあないか

ジエラ　（立ち上る）許してくれ給へ、僕は歌を上げよう、そうして君の手を握つてもつと高くを眺め希望を以て明日を待たう

ミシエ　もつと高い所を見ようね、この岩山の上には數百人たらずの人が二十五年以來救援もなくイギリスとベッドフォートに手向つて來たんだ

ジエラ　（熱情をこめて）あゝモン●セン●ミシエル……美しい山だ、滿ちては退く波の上に巨きな船が碇泊してるやうだ、鐘樓は帆柱のやうに、狹間は帆づなのやうに……僕らが生きてるうちは誰だつて切り込ませるものか

ミシエ　誰だつて……あゝ元氣が出たね僕もうれしいよ

第三場

ペイ　（右手より出る、ミシエに）あなたのお父樣がお呼びです、何か御注意が……

ミシエ　（ジエラに）ではまたあとで、よく祈り給へ、ね

ジエ　（ひとりになる）實に美しい建物だ、廻廊と云ひ、御堂と云ひ城塞といひ、石をたゝき花崗岩を刻んで彫り出した巧な技工は何に譬へよう、僕は今夜からこの山の守備になれるのだ、……この孤兒だつた自分が今夜——

（急に）

おや怪しい人が……

第四場

巡禮　御山の中に道を失ひこの夥しい石段と狹い通路のところに御堂があるのでせう、十字架さへ見えやしない、手でも引いてくれる者がゐたらなア……もし、あなた、年寄に目をかけて下さいよ

ジエラ　（怪しむ）おい、何處へ行くのだ

巡　（ためらふ）何處へ行くのだと、わしはこの年をして初めて此處に參詣に來たのです、有名な聖ミカエルのお山を見て死にたいと思つてな

ジエ　お前の名は

巡　通りがかりの者、昨夜わしはクエノンを渡つて來た、薄い靴でお山の道に足を痛めてしまつた、今朝はまた石段で途方にくれてゐる

ジエ　お前の故郷は？どこから來たのだ

巡　遠くの方、わしは遠くの方から來たのだ

ジエ　（もどかくしく思ふ）ノルマンヂーの人間か

巡　いゝや

ジエ　ブルターニュの人か

巡　いゝや

ジエ　フランス人か

巡　（當惑する）物乞をして歩く者に地上の生國が何の用に立つだらう、プルターニュだらうが、ノルマンヂーだらうが……天國だけが――（默想する體）――御堂に案内してください、わしはあなたの爲め、御兩親の爲めにも祈つて上げよう

ジエラ　さあ、こつちだ

（のぼる、巡禮の方をふりむくと巡禮は城壁をしきりに調べてゐる）

巡　何を見てるのだ

ジエラ　この大砲は何するのですか、イギリス兵が何か惡いことをたくらんでゐるのかね、昨日陸で早鐘が聞えた

巡　（勢よく）その早鐘のあとでお祝ひの鐘を鳴らしたよイギリス人の敗戰を祝つて

ジエラ　（ふいに）イギリス人が敗けたつて

巡　散々に

巡　誰がそんなことを云つたのだ

ジエラ　僕らはこの眼で見たのだ、えらい攻擊も哀れな失敗も

巡　（つぶやく）奴らは皆見て知つてるのだな――（ジエラに）誰のせいで勝つたのだね

ジエラ　風のせいだよ、聖ミカエル、ジャンダルク、諸聖人のお蔭で

巡　（小聲で）こゝではあの魔法使のジャンダルクを有難がつてゐるのだな

ジエラ　（巡、のあとから歩きながら之を聞き）魔法使だつて、ジャンダルクを、うそつきめ

巡　（びつくりする）なに、さういふ噂なんだ

ジエラ　誰がそんなことを云つたのだ、イギリス人だらう、自分達の罪惡をかばつてその破廉恥な行爲をかくす爲めにジャンダルクを火焙りにした……お前はそんな奴のいふことを信じるのか、このセン、ミシエルで……お前はジャンダルクが……

巡　さあ祭壇に行かう、時間が費えるばかりだ、輕はづみな言葉は許してくれ、
わしは何も知らないのだからさあ行かう——（一足、二足、歩いてまた止る）

ジエラ　なぜ止まるのだ

巡　隨分兵隊がゐるな、隅々、出口、扉毎に——どの位ゐるんだね

ジエラ　そんなことは構はないぢやないか——（小聲で）怪しい奴だ、間者かも知れないぞ——（高聲で）——巡禮

巡　（謙遜ぶる）わしは教會の中まで跪づいて行かねばなるまいな

ジエラ　（不審を高める）何だお前が

巡　こゝにヴォーセルさんといふ方がゐるさうだね

ジエ　ド・ヴォーセルなら僕だ

巡　（心配さうに）あなただつて、どうして

ジエ　どうしてつて、それは僕の名だ、僕のお父様はノルマンヂーの男爵だつた、
イギリス人さへもその武勇は知つてる

巡　確にこの城塞にもう一人他のド・ヴォーセル——弓手隊の——
（ポウ右手より出る）

あゝあそこへ來た

ジエラ　（心さわぐ）あのボウヴアールが

第五場

ポウ　（急いで來る）來たね、巡禮——（ジエラに）あつちへ行け

巡　（ジエラに）どうも有難う——（ポウに）隊長殿御自身で案内して下さいますか

ポウ　勿論さ——（ジエラに）かまはないでくれ

ジエラ　（歩く、小聲で）あゝ何のことだらう、立聞きしてやらう

ポウ　（ジエラに）どうしたのだ

ジエラ　（左手より出る）いよいよ怪しいぞ

巡　（ポウに）あの子供は君の名を知らなかつたよ

ポウ　（巡に）シーモア公爵——私は名を變へたのです——イギリスの爲めに……

こゝではボウヴアールです、然し公爵そのやうな變裝をして此處に來られるなんて

巡　苦痛も危險も耻も、いつかは復讐してやればいゝのだ、わしは悔悛の狀を裝つて顏を拵へてやつて來たのだ、番兵の誰可も身體搜索も宜誓も巧に切り拔けて來た、わしは空に眠をあげてバーテル・ノステルを唱へてやつた

ボウ　おゝ閣下

巡　無益に暇を潰すまい――一週間も前からわしはお前の來るのを待つてゐたのだに、狩にも來てくれなかつたな

（ジエラ出て柱の蔭にかくれる）

ボウ　我々の希望を裏切るつもりか、スケールスもソマアセットも君の說明を求めてゐるのだ

昨日私が出掛けようとすると城兵共は橋を上げてしまつたのです、私が力一杯吹かした角笛がトムブレーヌに聞えませんでしだか

シイモア　さう云へばさうだつた番兵が角笛を聞いたとか云つてゐた、然し君は來なかつたぢあないか

ボウ　私は縛られてゐるのです、どうも私を怪しんでゐるらしいのです、私は出來るだけおとなしく、自分を抑へて、自分を屈服……

シイ　ボウヴアール、有がたう、お禮はあとでな

ボウ　先づ昨日の失敗を取返す工夫をめぐらしなさい、船が岸の方に吹き飛ばされるのを見て城の中は嬉び狂ひましたよ、シイモア公……

シイ　（快活を失ふ）全滅したと思つてるのだな

ボウ　まあそんことでせう

シイ　（謎のやうに）二日と經たぬうちに攻め寄せよう、勿論君の內應をあてにしてゐるのだ、そうして城塞も修院も根こそぎにしてやらう

ボウ　二日のうちと仰有るのですか

シイ　間違なしだ、然し君をあてにしてゐるのだよ――（間）――解つたらうな

ボウ　見當はつきましたかね

シイ　司令官を手に入れることだ

ボウ　（びつくりする）デストビルを！

シイ　そうだ――（金袋を取り出す）――これがあればだ

ボウ　（輕蔑した口調で）金が

ジエラ　（さゝやく）いやしい心

シイ　（不意に）誰か聽いてるぞ

ボウ　（あたりを調べる）いゝえ誰もゐません――（間）――司令官が買收できると思つたら大間違ですよ、

シイ　（聲を落してゆつくりと）買收できなければ外になくなす工夫はあるだらう

ボウ　（傲然と）私はあなたの手引きはしますが主人は賣りません

シイ　（また金袋を出して）君は――

ボウ　そんな卑しい企は眞平だ、どんな命令にも從ふが人殺は厭です解りましたか

ね

シイ　君がやらぬとすれば外にやる人はゐないだらうか

ボウ　誰もゐませんよ

シイ　ぢやどうしてくれるのだ

ボウ　理窟は止めませう、公爵、あなたは私を誤解してゐたのです

シイ　君の憎惡に望をかけてゐたのだ

ボウ　私は誰も憎んではゐません、私は自分の國の爲めにつくしたばかりです

シイ　でも

ボウ　私の約束を覺えてお出でゝせう、私がノルマンヂーから遠く私の城をはなれてイギリスに捕虜になつて連れて行かれた時私は十四年の長い間淋しい牢屋の中に鎖でつながれてゐたのです

シイ　簡單に願ひたい

ボウ　初めのうちこそは望をつないでゐましたが、いくら經つても赦してくれない

ので根氣もつきはてゝ牢番に頼みました、憐れみを乞ふたのです、すると私の自尊心を傷つけることなくあなた方は私の願を聽き屆けてくれたのです、私に何でも返してやるといふのです、自由も權利も城も領地も――あゝその領地こそ祖先代々の領地です、そこで私の可愛い息子のジエラールがその母と一緒に殺されたのです

（ジエラ、驚愕する）

シイ　もう止せ

ポウ　私のあなた方から受けた命令といふのは名を變へてモン・セン・ミシエルに行け、すべてを報告しろ、それが濟んだら誓を立てゝこつそりと家に歸るがいゝ……これだけなのです

シイ　隊長、今日はもう少し過分なお願があるのです

ポウ　え、何を

シイ　さつきのことさ――（間）――そうすればベッドフオートにもとりなさう、名譽も……（ポウの手を握る）

ポウ　（振りはなす）とても駄目です

ジエラ　あゝうれしい

シイ　（心配さうに）何の音だ

ポウ　（あたりを見廻す）壁の反響です、誰もゐません――（間）――私は自分の約束はどこまでも守りますから、あなたの方も無理な御注文をなさらないように

シイ　（冷かに）ではいゝ、卒直に云つてしまはう、何の邊が一番手薄な所なのだ、足がかりのいゝ所はどこだ

ポウ　（やゝ考へ込む）ファニルの左手に石垣の壞れてる所があります灰色をした大岩の下、五尺計りのところの割目に鉤縄梯子を引かければよくかゝります

シイ　おやファニルの所だな

ポウ　確に

シイ　誰が當直だらう

ボウ　知りません、然しその服裝なら

シイ　（嬉しさうに）さうだ、誰がこんな巡禮を疑ふものが

ボウ　ひとつ見に行きませう

シイ　ぢや行こう

ボウ　（歩き出す、シイに）妻が妻ですからね

シイ　（笑ひながら）よしよし、解つた、二人とも、れ山詣りだ

（左手より出る）

第六場

ジエラ　（柱の蔭より出る）あの奴！おれは皆聞いてしまつた――そうだ警鐘を打つてやらう、シイモアは捕まるのだ――（間）――捕る？ではもう一人の男は？その案内者、あの共犯者は？もしシイモアを捕へるとすればあの男も牢屋だ、あの不幸の爲めに氣の荒んだ心の弱い勇敢な男、おれはあの何ものにも屈しない態度が好きだ、その心の苦痛に同情を寄せる、口に出すのもやつとだ

が、あの男はおゝ天主樣、恐ろしい……然しもしさうなら……あの人はもしや……僕の父ではないだらうか――（石卓に倚りかゝる）――胸がわく〳〵する――先刻息子のジエラールのことを泣いてゐた、その子といふのは僕だ、誰もお父樣は十五年前に死んでしまつたと思つてゐる、ところがお父樣は敵の手に十五年間捕へられてゐたのだ、そうしてまだ敵の手の中に在るのだ、悲みの爲めにその魂は閉ぢられてしまつたのだ――（數歩進む）――確にさうだ、あのイギリス人の卑しい軛の下にあつてもその氣性を曲げなかつた、金も卑怯な甘言も却けてしまつた、あの自由な心は金などで買へるものではない――（間）――あゝお父樣、お父樣さぞイギリス兵はあなたを苦しめたでせうね、髮の毛も白くおなり遊ばした、眼の光も消えてしまつた。でも、私の眼はどこかお父樣に似てゐるでせう――確にさうだ矢張りご自分の領地に歸つてそこで家族と同じ墓の下に眠りたいのだ――あゝ恐ろしい罪惡、――優しいお心――（胸騷ぎして）――でも裏切りをなさるのだ、僕は聖ミカエルの

騎士だ、フランスの兵士だ、フランスの爲めに復讐せなければならぬ、皆知つてる、イギリス人の陰謀の裏を掻いてやるのだ――(間)――おゝ主よ助け給へ、お父様を正しい道にかへらして下さい、私はその爲めに命を棄てゝも構ひません――(ふりかへる)――あ、司令官とクレキイだ、通り路に落して置かう

(羊皮紙に何事か認めて落して行く、左手より出る、デス。クレ、右手よりはいる)

第七場

クレ　イギリス兵は復讐を計畫してゐるに相違ありません、不意擊、計略、陰謀、何んでも爲兼ねない奴らですから――警戒を嚴重にして下さい、金に糸目をかけないで軍艦を修理してるさうですから、やがて、

デス　なにかそんな氣配があるかね

クレ　氣配どころではありませんよ、ポントルソンから來た漁師が見たといふのです、帆を縫つたり、小船を修繕したりする所を

デス　それで何う思ふのかね

クレ　此方が油斷してると思つてるのですからきつと攻めて來るでせう

デス　もう來るつて

クレ　司令、私の言葉使を氣にかけないで下さい、あなたは弱いと思はれる程安心してゐます、無鐵砲も見ぬふりをしてゐると益々つのりますよ

デス　然し、君……

クレ　(烈しく)あなたは昨日あの亂暴なポウヴアールがラモルシエールに對して無禮を加へたのを罰しましたか、懲戒を加へましたか、奴はもつと頭を低く温順しい歩きぶりをしてゐますか

デス　ポアヴアールはその場で過失を認めたぢあないか

クレ　あなたが果斷な人であると解つてればあとで後悔する所までやるやうなことはしなかつたでせう、苟も惡行は必ず罰されると知つてればすゝんで惡いこ

とをする場合は餘程少いでせう

デス　クレキイ、君は嚴格すぎる

クレ　あなたはあまりおとなし過ぎます、覗ひ所が解つたら遠慮はいりません、その心よりもその手を思ひ知らせてやりなさい

デス　君の足もとにある紙は何だ

クレ　（紙片を取り上げる）司令官、あなたの宛名です

デス　（讀む）讀んでみ給へ

クレ　（朗讀する）「司令官殿、城の内外に氣をつけなさい、裏切です」

デス　（紙を改める）誰だらう――わしを欺くつもりか、それとも危急を知らせるのか――誰だらう、署名もなし、計略かな

クレ　さうではないでせう、故意とあなたの通る路へ落して置いたのでせう

デス　（思案する）君、早く行つて番兵をふやしてくれ給へ、秘書室で會議を開かう、院長にも知らせてくれ給へ、すぐ少くも十人の騎士が

クレ　（奥の方にゆく）やあペルダンとクレンシャンが來ましたペイネルも……

デス　早く皆に、こゝに來るように頼む、わしの命令だと……

クレ　向ふからフオリニイもブレオーテイもボウヴアールも來ました――（デスの方にかけ戻る）優柔は禁物ですよ――（また奥の方へゆく）――諸君こちらへ

（騎士たちと言葉を交しながら出る、デス思ひ沈みながら歩む）

第八場

クレン　（歩きながらペルに）何かいやな知らせかな

ブレ　（フオリに）吉報か、凶報か

フオリ　凶報さ――（司令官を指し）あの顔を見ろ

（奥より騎士數名院長、ジエラ。ミシエル入り來る）

デス　どうぞこつちへ諸君

ジエラ　私達は？

ミシエ

デス　（二人に）こゝにゐてもいゝ――（騎士たちに）早くどこへでも腰をかけて下さ

い、院長とラモルシエールは私の右に――諸君の意見を腹臓なく述べて下さい、迅速に――（ゆつくり）諸君の意見を待つてゐます、諸君の協力を懇願します……内通する者が出ました

數聲　誰だ、誰だ

ペイ　どんなユダスだ

デス　（紙片を見せる）わしには解らない、――さつき見付けたのだ

ボウ　（不意に）誰が見付けたのです

デス　わしが……クレキイに拾はせたのだ

フォリ　書き手は？

ブレ　名前は？

數聲　誰だ

デス　名もなければ署名もない

ボウ　そんな話に信用が出來るですか

デス　それが聞きたいのだ

ペイ　僕は確からしいと思ふ

クレ　（力をいれる）信用してもいゝ、しなければいけないのだ、その方が注意深いやり方だ

デス　（ペイに）副官、これだ

ペイ　（讀む）「司令官殿、城の内外に氣をつけなさい、裏切です」

デス　どうだ、何う思ふのか、何うしたらいゝだらう

クレン　いゝ考も天から降つて來はすまい

院　降つて來ることもある、騒々しい先觸れもなく天はその聲を傳へることがある、解し難い文句を語る人が結局勝利を得るのだとにかく相談を怠つてはならない

ラモ　さうだ、どんな心配事であらうとも相談を忽かせにしてはならぬ、これが二十五年以來わしのやり方だ

ペイ　この紙片の意味はかうちあないかしら――各自の義務をつくせ敵を前に控えて油斷するな、明日の如く今日を恐れろ、彼にも心を許すな、城壁を厚くし、人の心に氣をゆるすな、とこんな風に

ボウ　然し一體何を恐れるのか、敵か、味方か、朋友か、誰れだ、繰返し云ふが敵か……あの烈しい暴風に打破られて軍用金はなし船はなしたゞ一向引上げの支度に昨日から心を奪はれてるあの敵か？いやはや諸君は晴天に雲の影を求めるにひとしい

クレ　（重々しく）晴れた空にも雲は去來する、「裏切だ」この言葉でわれらの存亡は迫つてる、自ら動かずとも仕事は出來る、姿を現はさずに事を企らむは賣奴の遣口だ

ボウ　賣奴！何處にゐるのだ、誰のことだ

クレ　僕は知らない、知つてれば騷ぎはしない――（間）――だがお互は安心するように騎士の名譽にかけて、神の前で誓はうぢやあないか

騎士一同　（起つて手をさしのべる）誓はう

ラモ　わしの名譽にかけて、命にかけて、いつもフランスの忠僕であることを誓ふ

院　聖ミカエルによつて、キリストによつて、その司祭、代理者たるわしは在天の諸聖人によつて、王室と祖國とシャル、七世に忠實であることを誓ふ

クレ　わしもその通りだ――神よわが忠誠を守り給へ

デス　わしは二十年の間、自分の幸福、財產、生命を犧牲にしてフランス王に忠實であつた。諸君と共に何の恐るゝ所なく、又、悔いる所なくこのフランスの一角を守るだらう、そうしてその爲めに命を棄てれば本望だ――ミシエル、こゝへ來い――（ミシエ父の側に行く、デスその額の上に手を置く）――諸君わしは賣奴ではない、わしの最愛の息子の、心と額の上に手を置いて誓ふ――（腰を下ろす）神よ、ノルマンヂーを守り給へ

ボウ　（靜に起ち上る）諸君

ジエラ　（眞中にかけよる）ボウヴアールさんちよつと

デス　ジエラール
院　ボウ　（ジエラに）止めるのか
ジエ　いゝえ、私が白狀するのです
院　え
ミシエ　（ジエラに）ジエラール、君が
クレ　これは不思議だ
ラモ　あれが犯人だつて
ジエラ　（力をこめて）しばらく……私は犯人ではありません、私はいつも忠義をつくすつもりですが私は陰謀を見たのです、私は賣奴を知つてゐます
數聲　名前を云へ
デス　名前は
ボウ　（小聲）あゝ
ジエラ　（デスに）この紙は私が書いたのです、司令官、必要なら私を人質にして下さい、私をどうでもして下さい、――私はこれ以上云へません

デス　頼むから
クレ　皆白狀してしまへ
數聲　名前を云へ
ジエラ　御無理です
クレ　云はしてみせようか
ジエラ　決して申上げません
ボウ　口を裂いても云はせるぞ、拷問……
ジエラ　（ボウを見る）ボウヴアールさん拷問して下さい
ボウ　（おどろく）嘘だ、出たらめだ、うそつきめ
ジエラ　私がしたのなら拷問して下さい、私はどうなつても私の言葉は嘘や僞はありません
ボウ　證據をあげて見ろ

ジエラ　證據ですつて――ぢや、フアニルの左手に石垣のこはれてる所があります、二日と經たないうちイギリス兵がその割目に鈎のついた繩梯子をかけるでせう

數聲　おう

ジエラ　この城の中をよく探すと巡禮の服を着た男がゐる筈です、貝殼と杖をもつて、金袋を――

クレ　金を

ボウ　あッ

ジエラ　（調子をゆるめる）ごめんなさい、私は少し云ひ過ぎたやうです

デス　（ペイに）早く行つてどの門の橋も上げてしまふように、誰も出してはならぬ、見知らぬ男がゐたらすぐ引立つて來い

（ペイネル出る）

ボウ　（傍白）もうおそい、心配のない所へ出てしまつた

欠

でもご存じだ、僕は自分の心を神樣だけに打開ける、さうして慰めていたゞくのだ――（間）――僕の涙を見て苦しさを察してくれ給へ、默つてゐるのは牢屋より十倍も百倍も苦しいのだ――（起ち上る）――囚人！あゝ、イギリス人が攻めて來るといふ時この言葉がどれ程僕を失望させるか察してくれ――あゝ囚人、僕は氣がどうかしてしまふやうだ

ミシエラ　囚人？ジャンダルクもさうだつたじあないか

ラモ　そうしてその堅固な信仰は牢番をも屈服せしめた、お前もジャンヌのやうに強くならなくてはいけない

ジエラ　この心の悶えを落付ける爲めに僕はあの聖い羊飼の名を呼んでもいゝだろうか、丁度天國の聖人の御名を呼ぶやうに

ミシエラ　どうしていけないことがあらう、誰が止めるだらう

ラモ　出來るとも――きつと敎會がジャンダルクを聖人の列に加へて祈る時が來ると思つてる、イギリス人さへも取次を願ふだらう――薪の山が祭壇になるの

欠

だ

ジエラ　ありがたう

ラ　モ　神は聖人によつて國を救ひ、國を建て直しなさるのだ、聖人を與へなさる以上は祈ることも許される筈さ

ジエラ　（熱心をこめて）失意の時も光榮の時も、いつも、フランスはジャンダルクを聖人の列に加へるように祈つてほしい

ミシエ　（耳をたてる）アンヂエルス

ジエラ　お告の鐘？

（一人の弓手、奥より出る）

ミシエ　呼びに來たのだ

ジエラ　もう時間！なんて時の經つのは早いのだらう、……そうして僕一人の時はどんなに長いのだらう

ラ　モ　ではまた、ジエラール

ジエラ　左樣なら

ミシエ　また、あとでね

（奥の戸から出る）

ジエラ　あゝ

第七場

ジエラ　（ひとり）一人になつた何の音も聞えない、段々暗くなつて來た――（左手の桂による）――あゝ、御堂の十字架の上に燕が往つたり來たりしてゐる――（椅子に腰を下ろす）――今夜はこの石の腰掛の上に眠るのだらう、眠りたくはないのだが體が疲れて眼が自然にしまるのだ、あの弱い光線すら痛い、――僕は眼を泣き腫らしてしまつた――（間）――弱いからだらうか、……いや、ジャンヌだつて牢屋の中でも薪の上でも泣いた――（間）――涙が出る、あの人の爲めだ、神樣は私の祈りを聽いて下さるのだらう――もしお父樣が僕の泣いてゐるのをごらんなつたら……おゝあのお父樣も矢張りお泣きになつた

のだ――あれ程まで自由を愛したお父様が、私がお父様の爲めに自由を棄て
て汚のない若い命を惜みもせず甘じて鎖につながれてゐるとお聞きになつた
ら――（奥の方に行く――歌の聲聞ゆ）――あの祈の聞の美しかつたこと……
ゴチックの天井の下に波のさゞめきのやうに奇麗なリタニイが反響を起し
て……僕はもう皆と一緒に歌へなくなつたのだ――（前の方に來て腰をかけ
る）――夜が來た、靜な……風だけが眼を醒してゐる、金色の星が瞬たゝいて
ゐる――（段々眠りに落ちる）――おや、番兵の足音が聞える、頭が重い、

聲　聖ミカエル……（眠る、現のうちに何か拂ひのけようとする）止して下さい、
邪魔をしないで眠らせて下さい、あゝ疲れてしまつた――（間、……皎々とした
光、ジエラールを裹む）――この眩しい光は何だらう、誰が天でこんな燈を
つけるのだらう、隨分明るいな……美しい空！

ひとやのうちに　とらはれて
なみだにむせぶ　ひとの子に

なぐさめあれよ　われは主の
つかひめなり　おとめなり

ジエラ（起ち上る）おや何の音だらう、あの美しい歌は何處から來たのだらう、天の
こだまかそれとも人の聲かしら、何だか心が輕くなつた――もつと何か云つ
て下さい

聲　ひとのなげきも　くるしみも
いつかはおはる　時もあり
のぞみをたもて　われは主の
つかひめなり　おとめなり

ジエラ（兩手をさしのべる）あゝ、自由になつた、鎖が落ちてしまつた、夢だらうか、
夢？いゝや、そらこの通り見える――早く、なつかしい國の名を歌つて下さ
い、私は何でも命じられるまゝにいたします

聲　わがみにかゝる　くるしみを

よろこびむかへ　いさましく
たえずたゝかへ　われは主の
つかひめなり　おとめなり

ジエラ　苦しみ！確にさう云つたな――（間）――皆消えてしまつた、何もなくなつてしまつた、どうしたらいゝのだらう、あの聲は天から來たのだらうか――（奥の方をふりむく）おや、誰だらう薄暗い隅つこの方に

第八場

ボウ　（奥の方より出る）うむ、そこにゐるな、返事を貰ひに來たんだ――何故お前はわしを皆に憎ませたのだ、昨日も今日もあの會合の席でわしを睨みながら、幾度も「あいつだ」と云はぬばかりの言葉を使つたのか

シエラ　あなたは

ボウ　（劍に手をかける）貴樣は確に云つた、口で眼付で、沈默で……すべてがおれを訴へた、うそつきめ

ジエラ　そんな亂暴なことを云ふのは止めて下さい、――あなたは知つてるのですか……

ボウ　何も知りたくはない！貴樣だ、おれを訴へるのは――貴樣はおれを責めるのだ、そうしておれに……

ヂエラ　ド、ヴオーセルさん

ボウ　（つぶやく、後去りする）ド、ヴオーセルだつて！知つてゐるのかな――（だんだん進む）――おれをやつつけようとするならもつと良い時機を選ぶがいゝ、イギリス兵が攻めて來やうとする物騷しい時に、裏切、賣奴だなんて……この忠良なフランス人を

ジエラ　忠良なフランス人ですつて！あなたは昔さうでした、あなたは……

ボウ　何だと、今はさうぢあないといふのか、よくもそんな惡口を……

ジエラ　さうであればいゝのです

ボウ　何だと

ジエラ　お願いです、あなたの可愛い、息子の名によつて

ボウ　おれの息子だつて

ジエラ　あの卑怯なシーモアの計畫を裏切つておやりなさい

ボウ　（おのれを忘れ）よせ、默れ、口のへらない奴め

ジエラ　（手を差しのべて）切らないで下さい、私は

ボウ　（劍をふり上げ刺す）死んでしまへ！

ジエラ　（よろめく）お父樣！——（腰掛の上に仆れる）——お父樣！

ボウ　（恐怖）お父樣だつて？何を云つてるのだ、おれは何をしたのだらう、何といふ運命のめぐり合せだらう

ジエラ　（體を起す）私はジエラール、ド、ヴォーセルです

ボウ　ジエラール！——（體をかがめる）——本當か、お前がわしの子か——（血を止めようとする、布で傷口を繃帶する）——もつと話してくれ——あゝ眼が閉ぢた、額が青ざめて來た、頭が垂れて來た、わしの腕を求めてゐるのだ、

——（跪ぎ抱へる）——呼吸かある、ジエラール、大丈夫だ、助かる、しつかりしろ、おい、お聽き、わしは忘れないぞ、自分の義務も、天主樣もフランスも——（起き上る）——おゝわしは此の尊い名を唱へる資格があるだらうか、わしは惡かつた、おれを罰してくれ、人殺し、自分の子を手にかけた大惡人——（また、身を屈めてジエラの手をとる）——赦してくれ、もう酷くはしないから

ジエラ　（正氣に復す）私はどこにゐるのだらう

ボウ　わしの傍にゐるのだ、お前のお父樣のそばに、もう恐がるな、死んではいけないぞ——これ、わしが解るか、わしを覺えてゐるか、人殺のわしを——この涙を見ろ、わしは跪づいて罪を後悔してる、そうしてすぐにもお前の爲めに仇を討つてやる、討死する

ジエラ　お父樣あなたですか

ボウ　そうだ、この通り後悔の涙に咽んでゐるのだ、ジエラール、赦してくれ

ジエラ　お父様

ポウ　（さゝえながら）おゝ天主様、何といふお惠でせう、私の子はこゝにゐるのです、生きてゐるのです、私の抱いてるのは私の子です、――血が流れてゐる、殉教者の血が……私は自分の涙をこの血に混ぜたい、殉教者の血と痛悔の涙とを

ジエラ　お父様

ポウ　お前の眼はお母様の眼付にそつくりだ、確にわしの子だ、――お前は忘れられても嫌はれても呪はれても切られてもお前は立派な子だつた

ジエラ　（元氣を恢復する）お父様私はあなたと一緒にゐたいのです、そしてフランスの爲めに盡したいのです、お父様は二十年の間さうしたのでせう

ポウ　お前はどうしてそれを知つてるのだ

ジエラ　私は幾度もお父様の勇氣と忠義の話を聞きました、然し誰でもお父様が敵の手にかゝつてお亡なりになつたと思つてゐるのです

ポウ　あゝ、さうだつた、あの汚らはしい價で命を助けてもらつたのだ――いや賣られたのだ

ジエラ　もういゝのですよ、私は皆聞いてしまつたのです、昨日、あなたが司令官を殺してくれといふシモアの願をおきゝにならなかつたことも皆な……

ポウ　ジエラール、お前が？

ジエラ　あなたが皆仰有たのです、――お父様の心は誰も知りませんよ、誰もあなたを疑つてはゐないのです――さうしてお父様のなすつたことは皆私の胸にしまつてあるのですから大丈夫です――（間、うれしさうに）――二人でフアニルに參りませう、そうしてイギリス兵をやつつけてやりませう

ポウ　お前がその傷で！……だがあの燒け落ちた城から誰がお前を救い出したのだ

ジエラ　死にさうな人を探して祝福を與へて歩る〳〵修道士ださうです、その方が私をこゝに連れて來たのです、そうして私は此處で戰のうちに育つて何の怖れも知らずに天主とフランスと王の戰士になつたのです

ボウ　（悲しさうに）そうしておれは

ジエラ　お父様私はいつも心の中にあなたの名とあなたの手柄とを思つてゐました、そして後の世で會ふのを嬉んで待つてゐらつしやるお母様のことも……私は現在に何の不足もなくたゞ未來を待つてゐました

ボウ　あゝ未來！

ジエラ　（起つ、力をいれて）お父様とご一緒に、ジャンダルクの爲めに、眞の兵士——（仆れる）——まだ血が出る、力がなくなつて來……（氣絶する）

ボウ　（叫ぶ）誰か來てくれ、誰だそこへ行くのは

第九場

院　（奥から出る）お呼びですか、すぐ行きます——（急ぎ來る）——おゝどうしたのだ、間違ひか、それとも人殺か

ボウ　（ジエラを抱き起す）院長様、手を貸して下さい、助けてやつて下さい

院　（手を貸す）實に酷いことをしたものだ

ボウ　賣奴の仕業です、ジエラールの訴へた……そうして本心に立ちかへらせた——（間）——卑怯者、犬、ボウヴアールといふ名の……本名はジエオフロア、ド、ヴオーセル——ジエラールの父の

院　（おのゝく）あなたがジエラールの父ですつて

ボウ　（嘆願する）たつた一言憐れみの言葉をかけて下きい、私は慄へてゐるのです、絶望してゐるのです、ジエラールは赦してくれました、私の心は張裂けるやうです、私は心から痛悔してゐるのです、あゝ苦しい

院　天主は罪人の死を望みません、罪から活きることを望み給ふのです

ジエラ　（正氣づく、院に）どうぞ他人に云はないで下さい、お願です

院　決して口外はしない

ジエラ　あゝ助かつた、お父様も私も

院　堅く約束する

ボウ　（非常に感動する）あなたは何と優しい人だらう、それで私も安心した

院　（ジエラに）でもジエラール、傷の手當をしなければならない、わたしの腕に頭をのせて靜かに歩いて行かう、私の部屋まで

（靜かに行く）

ボウ　（後より歩く）院長樣、私は

院　來てはいけません、人目を避けた方がいゝでせう、痛悔の心が望むまゝの所へお出でなさい、それから職務と戰の場所へ

ジエラ　（ふりかへる）ではお父樣、あとで一緒に

第十場

ボウ　（一人）あゝおれの胸は波を打つてる、何といふ日だらう、實際これが自分の爲たつただらうか、こんな惡人の、イギリス人にこんな城の中に追ひ込まれ、卑しい夢に釣られて……もとは非難のない、何も恐れない立派なフランス人だつたが――（間）――おれの頭はどうかしてしまつた、人殺！このわしが――（地面をじつと見詰める）――血が赤くついてゐる、この血だ――あゝ天主の罰！この血は拭ひ去られてもわしの手についた血、魂についた血は拭ひとられまい、あゝ何といふ憐れな姿だらう、この汚れた自分を――（跪く、倚子にもたれる）――天主樣、私は二年以前お祈りをしたことがありませんでした、何卒私を赦して下さい、私を憐んで下さい――（沈默）

第十一場

クレン　早く、早く

ペイ　（入り來る）おや、ボウヴアール、そんな所へ跪づいて……修道士のやうに

フオリ　當り前さ、今は祈る時だもの

クレン　（ボウの起き上るのに）イギリス兵だ！

ボウ　やつて來たのか

ペイ　二矢ほどの所へ――暗に乘じて近づいたのだ

クレン　夜明になつて不意打をするつもりらしい、――明日の朝になつてみろ、あべこべだ

フオリ　ときの聲を揚げてやれ、こつちが氣がついたことを知らせてやれ、さあ城壁に

數聲　城壁だ

ベル　（來る、騎手、引手多數、各々松明を持つ）さあ出ろ出ろ

皆　早く早く

ベル　騎士も兵士も、町も修院も大變な騒ぎだ

ベイ　（劒を拔いて）進め！――（ボウに）さあ行くのだ――（騎士に）進め！

（幕）

第四幕

教會堂側面の廣庭――右手は教會堂の入口、石段數階――奥の手に稍低き城壁、海を見晴す――左手、高き城壁、奥に近く小塔、扉を附す――倚子數脚

第一場

クレ　（小塔の扉から入る、劒を持つ）誰が鳴したのだ

ラモ　（教會堂の石段の上で）警鐘だ

クレ　いよいよわしらを葬むる鐘だ、畫前にイギリス人はこゝに侵入して來るだらう

ラモ　（降りる）クレキイ、それは本當か

クレ　（奥の方へ連れて行く）ファニルの方をごらんなさい、彈丸で城壁が壞されてしまつたでせう、あんな口が開きました、狹間が頽れて來たではありませんか

ラモ　あゝ、もうお仕舞だ

クレ　城の周圍をごらんなさい、波の上げて來るやうに奴らが押寄せたではありませんか、二萬人……もつとかも知れませんよ

ラモ　こつちの騎士たちは何をしてゐるのだ

クレ　皆自分の務を盡してゐますよ、然し幾人あると思ひますか、――百人足らずですよ、ほら、あそこを、頽れてゐる所を塞でゐます、ファニルの門に障壁が出來たでせう

ラモ　火は止んだかね

クレ　えゝ止みました、敵は今負傷者や死人を片づけてゐる所です、舟や伐で運ぶのでせう、あそこで待つてゐます、あの邊は大波も風もない所ですから

ラモ　あゝ可哀想に

クレ　生きてる者は戰ふのだ――イギリス人もこゝに入るには百二十人の騎士の死骸を乘り超えなくてはなるまい

ラモ　わしは年のせいで敎會の番を賴まれたがわしを殺さないうちは一歩も踏み込ませるものか、敎會の入口で仆れゝば本望だ

クレ　修道士たちはどうしたでせう

ラモ　この向ふで土壁を作つてる

クレ　（愉快さうに）誰も一生懸命だ

ラモ　聖ミカエルも我われがかうして戰ふのと見て嬉んで居れるだらうよ

クレ　院長は？

ラモ　御堂でお祈りです

クレ　手負かあつて探してるのです

ラモ　誰だ

クレ　ボウヴアール、弓手隊長の

ラモ　ボウヴアール？

クレ　ファニルの傍で、岩の下に血だらけになつて仆れてゐたのです

ラモ　重傷か

クレ　存じません、よく戰つたそうです

（出る敎會の中に入る）

あの無鐵砲な勇氣も惡く云ふまい、――最後の挨拶に行つて來やう――立派

な武士で

（出る、ジエラ、右手奥より入る、左肩に外套を掛ける）

第二場

ラモ　（ジエラールに）誰が許してくれたのか、院長様か

ジエラ　さうです

ラモ　おめでたう

ジエラ　私の一番望んでることを誰も許して下さいません、あなたは私の願をお察しでせうね、あなたは……

ラモ　ジエラール、よく解つた、聽いてやらう

ジエラ　もし戰が始つて、それを眼の前で見てゐても戰に出られないとすればどんなに苦しいかお解りでせうね

ラモ　どんな惡もどんな苦しみもそれには及ぶまいな

ジエラ　私はクレンシヤンや――ペイネルやボウヴアールなどの騎士達が勇しく戰つてゐるのを見たのです、ミシエルがその父の側で初めての戰をしてるのも見たのです、私の心は養え立つやうでした、十八にもなれば人並に討死することが出來ないのでせうか、もし劍があれば

ラモ　さあこゝにある、フランスの魂のこもつた劍が、――それは三十年も……

ジエラ　ではあなたは

ラモ　わしはこゝにゐるのだ、居ろと命ぜられたから――（劍を渡す）では後で、また此處へ持つて來てくれ

（ジエラ出ようとする）

第三場

院　（教會堂から出る）待て、ジエラール、どうしてそんなことを

ラモ　院長、私が

ジエラ　どうぞお願です

院　（ジエラに低聲で）血はどうした

ジエラ　（近よる）もう大丈夫です

院　（きつぱりと）ジエラール、わしの云ふことを聞かないのか

ジエラ　院長様

院　いけない、從順の方が美しい、劒をお返しなさい——（ラモに）——負傷してゐるのだから

ラモ　負傷！ジエラールが、誰に、イギリス兵に？

院　（力をいれて）ジエラールはわしの腕にもたれて息もなくなりさうに蒼ざめてゐた、昨夜も碌に眠れなかつたらう、それで戰に出るなんて——（ジエラに）——その年では未だだ

ジエラ　私はもう立派に討死出來る年です——（小聲で院に）——私はお父様のそばで

院　（急にラモに）誰か呼んでるさうだから一寸……

ラモ　私もご一緒に、死ぬ前に是非一度……

ジエラ　（ラモに）男爵、誰のことです

ラモ　あのボウヴアール、死にさうだと

ジエラ　えつ、死にさうですつて、ボウヴアールが……

院　（ラモに）どうぞお先へ、わたし達は後から行くから

（ラモ出る）

第四場

ジエラ　（嘆願する）死にさうなのですか、えゝ？

院　息はあるのだよ

ジエラ　こんな側にゐるのですもの、私はすぐ行きます、どうしても行きます、慰めに、話しに、その言葉を聽きに

院　いま行つてはいけない、もう少しお待ちなさい

ジエラ　待つのですか

院　お前が行くと却て興奮してしまふ、ボウヴアールは平和と聖寵とを願つてゐる、その心は祈りと痛悔にあふれてゐるのだ、間もなく確にお前の望むやう

なもとの人間に立ちかへるだらう

（左手より急ぎ出る）

第五場

ジエラ　（教會の石段の上で）主よ、どうなりませうとも、御旨のまゝに、そうしていつかは「主よ父は私のものになりました、あなたの許に還つて來ました」とお禮を申上げられますように

ミシエ　（左の方から出る、嬉しさうに）あゝジエラールそこにゐたのか、僕は急いでやつて來たんだ、大砲は止んだし敵も進まうか何うしようかと思案してる暇をぬすんで……戰の最中に君の赦されたのを聞いたよ——然し君の友達があゝやつて戰つてゐるのに君はどうしたといふの、君はジヤンダルクのことを忘れたの——これは失敬ついね、惡く取らないでくれ給へね

ジエラ　（悲しさうに）僕は負傷したんだ

ミシエ　負傷？イギリス人に？

ジエラ　（返答に困る）外の人に

ミシエ　いつの戰でさ

ジエラ　僕は戰に出やしなかつたよ

ミシエ　ぢあ、どうしたの、何かの拍子でかい

ジエラ　（ゆつくり、努力して）城の中にはいつて來てね

ミシエ　誰が？ひどい奴だ、僕が仇を

ジエラ　もう捕まつた

ミシエ　もう！——皆、話してくれ給へ、ね、——（間）——また、秘密？

ジエラ　あとで皆、解ることだよ

ミシエ　何時

ジエラ　勝つたあとで

ミシエ　夕方までにだらうね

ジエラ　イギリス兵を追ひ散らしてくれ給へ、海岸の方まで追つめてやり給へ、そう

して

ミシエ　それから話してくれるの

ジエラ　あゝ――（急に）――復讐してくれ給へ、二人分を

ミシエ　僕はもう夢中で戰つたよ――君が見てゐたらば……かうなんだ、僕はお父様の傍にボウヴアールと一緒に……

ジエラ　（せく）ボウヴアールと一緒だつて

ミシエ　あの心、あの勇氣、あの沈着――敵は僕らを取卷いた、鐵の鉤のついた繩梯子が岩にかゝつた、ボウヴアールもお父様も僕もペイネルも皆で腕の續く限り敵兵を叩き切つてやつた、シイモアは不意を喰つて咽喉一杯吼えてゐたよ、そうしてボウヴアールばかりを狙つて方々から弓を射かけた、それでボウヴアールはたうとう仆れたんだ

ジエラ　それから

ミシエ　（奥の方へ行く）そら、そこへ連れて來たぢあないか

ジエラ　おゝ――（前の方に出る）

ミシエ　來た、來た、院長樣とラモルシエールが支へて、……院長樣はこつちへ何か合圖してゐる――（間）――僕はまた行つて來る……よかつた、またあの勇士に遭へて……僕は出がけにあの手を握つて行くよ、――では左樣なら

第六場

ジエラ　（入口の近くで）何といふ重い足取だらう、頭は垂れてゐる劔がぶらぶら腰にぶつかつてゐる、顏の色の蒼さ――（ボウに）――お父樣！

ボウ　（眞中に來る）諸君、息子の前に跪づかして下さい

ジエラ　私の前に、どうてしそんなことを

ボウ　（ジエラの方へ向く、その手を取る）ジエラール、お前の手を出し負傷した頭の上に置いてくれ、天主樣はお赦し下すつた、お前も赦してくれるだらうな

ジエラ　お父樣、私はあなたを愛します、私を抱いて下さい、腕をひろげて――（ボ

ウ手を差出す）――隨分苦しかつたでせうね――（ボウの右肩にもたれる、院、ラモ、奥で談る）

ボウ　お前もな、わたしは嬉しくつてじつとしてゐられない位だ、もう氣がせいせいとした、死んでも構はない

ジエラ　大丈夫です、確に

ボウ　そんなことはどうでもいゝ、天主様が、お召しになるなら用意は出來てる、今晩にでも……わしはフランス人として死ねるのだから

ジエラ　今朝の戰は實に見事ださうでしたね、あの巡禮を見事にあしらつてやつたのでせう

ボウ　（おどろく）お前、知つてるのか

ジエラ　お父様私は何でも知つてます、私は得意なんです――私が鎧を着てあなたの傍で反身になつて歩く日が來たらどんなにうれしいでせう

ボウ　わしはもう力がなくなつて來た、もう最後だ――（敎會堂を指す）――祭壇の前に持つて行つてくれ、わたしは其處で死にたいのだ

（ジエラを補けてボウを支へる）主よ彼を憐み給へ

（三人、敎會の中に入る）

院　

ラモ　（目送して）我らを憐み給へ――（急いで奥に行く、塔の傍で）――何の音だらう、――町の中もざわついてゐる、誰か來たやうだ……デストビルか

（デス、騎士たち入る、皆、手に劒を拔いて持つ）

第七、塲

ラモ　（デスに）司令官

デス　（騎士に）皆、こゝへ寄り給へ、仆れるなら此處で仆れよう、卑怯な死に方はすまい

ミシエ　（かけつける）イギリス兵が侵入して來ました、占領々々と口ぐちに叫んでゐます

デス　氣の早い奴らだ

ブレ　（弓手と共に入り來る）あの関の聲
クレ　癪に觸つて堪らない
數聲　（遠方で）聖ヂョージ！
騎士達　（劔をあげて）聖ミカエル！

（ペイはいる）

デス　副官、何だ
ペイ　司令官、敵軍の軍使です、お許しになりますか
デス　此方へ
クレ　（力をこめて）計略だ、諸君――（デスに）私達が軍使と話してる間に攻めようといふのだ
ペイ　スケールス公は返事のある迄、必ず待つてると宣誓した
デス　諸君、軍使に道を開けてやり給へ

（列、開く、一人のイギリス兵ペイ、に導かれて入る、デスに紙片を渡す）

デス　（署名を見る）スケールス公だな
クレ　降服の勸告だらう
デス　（ペイ、に）副官、續んでくれ、――諸君、靜に
ペイ　（讀む）――ドムフォートの指揮官にしてノルマンヂー攻略軍總司令官たるロード、スケールス、イギリス並にフランス國王ヘンリイ六世の名により……
クレ　フランス國王だと
ペル　何といふ侮辱だ
クレン　夢を見てゐるのだらう
フオリ　よく考へてものを云ふがいゝ
ブレ　フランス國王！
クレ　暗愚な王の一人さ

（イギリス兵憤激の表情）

デス　（弓手に）この男を逃すな

（弓手、取卷く）

ペイ　（讀む）モン、セン、ミシエルの修院長、並に要塞司令官ルイ、デストビル閣下並に以下の各騎士に告ぐ、速に城門を開きて無條件降服を爲すべし、且その承諾の證據として直に敎會の塔に我がイギリス國王の旗を揭ぐべし、以上、ロード、スケールス署名

デス　諸君、どうぢあ

ブレ　あくまで奮戰して勝たう、さうでなければ共に討死だ

クレ　こんな無禮な勸告をよこすなんて

デス　（書狀を引裂く）われわれの王はシャル、七世だけだ

（歡呼の聲あがる）

（ペイに）すぐ十字架の側に金の百合花のついた旗を揚げてくれ給へ――皆もそれを見て新らしい元氣が出るだらう

クレシ　あれ、聖ヂョーヂといふ叫聲が聞える

クレ　あの聲の出る口を釘づけにしてやれ

ベル　暴君をやつつけろ

ブレ　さあ戰だ

デス　イギリキ兵はこの狹い道へ打重なつて進んで來る、ろくに自由のとれない町を一杯になつて登つて來る、並んでは四人――精精五人やつと通れる位なのに……スケールスもそこまでは考へなかつたやうだ

ペイ　ファニルでもすつかり計畫の裏をかゝれて……ボウヴアールに

デス　實に勇敢な奴だ助かつてくれゝばいゝが

クレ　一寸、決戰をするに當つて後顧の憂はないでせうな、昨日の密告者は？

第八場

院　（ジエラと一緒にはいる、敎會の石段の上から）無用の御心配だ聖ミカエルのゐる家には賣奴はゐません

デス　（院に）確かですな

院　首にかけても

クレ　あとで裁判を願いますぞ

院　もう濟んだ

クレ　あの子供のことですか

院　こゝにゐます

クレ　こゝにゐるつて、自由になつたのですか

院　そうです、わたしも保證する、この子供は私の知らない間に血を流して沈默の價を拂つたのです

クレ　また新しい秘密！

院　私は天主に誓ふ、裏切の心配はこゝにはない——（デスに）司令官、ジエラールの願を聽いてやつて下さい

ジエ　（白い旗を捧げ）司令官殿どうぞ私に……

デス　何だ、その金地に何か文字の縫取してある旗は

ジエラ　ジャンダルクが戰爭の時持つてゐた旗です、イエズス、マリアと書いてある旗からは希望の光が差し出るのです——敵の指揮官、ロード、スケールスこそはジャンダルクの爲めにオルレアンで散々に破られた大將です、——スケールスはこの旗を見て昔を思ひ出すでせう、そうしてこの旗がまた自由と復讐の爲めに飜へるのを見て吃驚するでせう

デス　誰か戰の眞最中にその聖い旗を持てるのだ

ジエラ　司令官、何の役にも立たない私がこれを持ちませう、どんなことがあつても放しません、私の手が切られなければ

デス　立派な子供だ

クレ　頼もしい心だ——（ジエラに）——ジエラール、わたしはお前を責めたがそれは義務の上からだわたしはお前に感服する

ミシエ　（ジエラに）僕はその旗の傍に居よう、もし敵が向つて來たら——君の手が疲

れたら敎へてくれ給へ、僕はどんな危險の場合でもきつと守りに行くから

デス　(ペイに)早く、こつちの旗を出すように——(イギリス兵を指して)——この兵士を連れ戻してくれ

(ペイ、軍使と共に出る)

では愈々最後の時に當つて二十年以來われらを守護した聖ミカエルの助けを願はう——聖ミカエル我らを助け給へ

院皆　我らを助け給へ

(院、敎會の中に入る)

デス　ドムレミーの少女われらを助け給へ

第九場

ボウ　(院の腕に縋つて辛じて歩く)司令殿

デス　おゝ君か、君の勇敢な働きのお蔭で今朝の戰には勝てたのだ——そんなに負傷してゐるのにどこへ行かうとするのだ

ボウ　戰にです

デス　いや、いけない、友達として勸告する

ボウ　イギリス人は私の血を半分しか取らなかつたのです

デス　君は大變興奮してゐる、そこにゐ給へ——よろよろしてゐるぢあないか

ボウ　(ジエラの傍へよる)かうしてジエラールの腕に縋つて、その側にゐればまだ戰が出來ます、——フランスの爲にあゝうれしい

デス　(手を差のべる)では君のね望みに任せよう——(奥の手の方を見て、兵士たちに向ひ)——自分が死に臨んでゐても死を少しも恐がつてゐないのだ、實に立派な勇士だ

ラモ　(デスに)司令官、私は

デス　君は祭壇と修院とを守つてくれ給へ、萬一、敵が侵入して來て敎會の中までは入るやう、なことがあつたらその時こそ君は思ふ存分腕を見せてやり給へ

——(騎士たちに)さあ決戰だ

（騎士達出る、ボウ。ジエラ。ラモ、院、殘る）

ボウ　（ジエラに）ジエラール、こつちへ來い

ジエラ　熱があつて苦しいのでせう、お父樣、それなのにあんな望みは……

ボウ　止めてくれるな

ジエラ　寒氣が……

ボウ　ジエラール、こつちへ來い、わしはもう直つた、大丈夫だ手を貸してくれ

ジエラ　（一足二足進む）おゝうれしい、然し何といふ悲しい務めだらう

ボウ　お前のお父樣はな、卑怯だか何うかいまに解る——旗を高く上げろ、敵にわしらの進むのが見ゐるように

ラモ　（ボウに）ではご機嫌よう

院　しつかり

ボウ　（院の手に接吻する）天國で

（皆、出る）

第十場

院　（塔の入口で）あゝ見ると怖ろしい光景だ、イギリス兵が城壁を壞してゐる、城の門を開けようとしてゐる、あの雲霞のやうに進んで來る大軍をごらんなさい

ラモ　劍の林、甲の波、ときのこゑ、雨のやうに降つて來る矢——まだ敵は退却しないのでせうか

院　いやどうして——あゝ門を開けた、味方の騎士が二三十人ほど橋の上に躍り出て互に劍を拔て切り合つてる

ラモ　（興奮する）負けるな、騎士共、フランスの爲めだぞ

院　ペイネル、ベルダン、デストビル父子。クレキイ、クレンシヤン……皆、よゝ戰つてる……追落し、切仆し、突き散し……うまいうまい

ラモ　どつちが？

院　（恐れの色浮ぶ）押し合ひ、へし合ひ下からは敵の新手がどんどん登つて來る、

——恐ろしい混戰、どこを見ても及が舞ひ動いてゐる——(間)——あゝ、もう駄目だ

ラモ　駄目、負か

院　イギリス兵が雪崩のやうにはいつて來た——(敎會堂の扉に走つて行き跪く)

——おゝジャンダルク

ラモ　(自分で戰況を眺める)ジエラール、あの白い旗が眩しく光つてゐる、搖めいてゐる——(間)——おゝあの靑空に飜へつてる旗に向つてイギリス兵が手をあげてゐる——水に溺れかゝつた人のやうに……院長樣勝利でよ、あれをごらんなさい

院　あの混亂、塔からも城壁からもイギリス兵が突落されてゐる

ラモ　城の下は？

院　敵は武器を投棄て伐や大砲を拋り出したまゝ泥海の中へ逃げて行く

ラモ　味方の騎士はどうしたらう

院　風のやうに彼方此方をかけ廻つて逃げおくれた敵をなぎ仆してゐる

ラモ　わたしがもつと若かつたらな……しつかり、もつとやれ、砂の上にたゝき倒してやれいまに波が上げて來て經帷布のやうにその上に被さるだらう——こんな嬉しい日はない

院　明日はもつと愉快だらう

ラモ　イギリス兵もこれで諦めたらう

院　さうさ、これが暴れし仕舞だらう

ラモ　騎士萬々歲だ——(間)——わたしも勝利の分前に與りたい、……一寸待つて下さい、勝戰を見て來ますから、この眼で敵の逃げて行く所を見たいのです、——(力を一杯こめて)——行つてしまへ、もう歸つて來るな……大勝利だ

院　(右手奥の戸より出る)

第十一場

(耳を澄す)何だらう……あの痛ましい聲は……ジエラールかしら

（ジエラ入り來る）

ジエラ　お前の旗は？

院　確かです、よく守りました、私の友達が――（訴へる、泣く）私の弱い心を強めて下さい――お父様が……死にました

ジエラール　あの亂軍の中で……最後に、赦して、と云つて眠を天の方に向けて――（間）――私はもうお父様に會へないのです、あの私の愛してゐるお父様を――（倚子の上に仆れる）

院　（ジエラの側に來る）あゝ美しい最後だつた、見上げた忠節、立派な臨終

ジエラ　（すゝり泣く）お父様は死んでしまつた！

院　幸福な信者として、凱旋したフランス人として

ジエラ　お父様！

院　（敎會を指して）ジエラール、お出で祭壇の前に行かう、そうしてこの犧牲を

天主様に捧げよう

ジエラ　えつ、苦しい犧牲を……孤兒だつた私にお父様が出來たのはやつと昨日でしたのに、もう今日はお亡なりになつてしまつたのです、私のたつた一つの慰めを天主様が奪つておしまひになつたのです――（間）――あゝ私にはもう力がありません、何んだか……

院　（支へる）どうした、しつかりしろ

ジエラ　夕方までゝせう、此度は私の番です、さつき、あそこでも血が……

院　ジエラール、どうした

ジエラ　（胸を壓へる）二度劍でやられたのです……少しでも動くと――（立ち上る、院、支へる）――もうだめです――（一、二歩あるく）――院長様、私をあの修院の中へ――私がお父様の手にかゝつて血を流した所へ連れて行つて下さい、私はそこで死にたいのです、私はお父様の爲めに贖をして命を天主様に捧げたいのです、院長様許して下さいますか

院

よろしい、許してあげよう

（二人、教會の中にはいる、數名の騎士入り來る、奥の方で頻りに戰況を物語る）

第十二場

ブレ　（入る）大勝利だ

クレン　（奥の方に半分、向き直り愉快さうに）あのグランビル。アルドボンの方を見

クレレ　給へ、灰色の空の下に霧に包まれて落ちて行く姿はまるで羊の群のやうだ

ブレ　フランスの大勝利だ

フオリ　これでフランスはどんなに安全になつたらう、イギリス兵もノルマンヂーから追拂はれてやつと平和が廻つて來たのだ

クレン　何にも持たずに、ぽつぽつ不名譽な退却をして行くぢやないか

クレ　ぽつぽつ所か驅け出してゐる

ブレ　足は達者だな

フオリ　氣の毒に

クレン　此夜はゆつくり眠られるだらう

クレ　がつかりしてかい

フオリ　（ブレに）もう來まいな

ブレ　（うれしさうに）僕のせいぢやないせ

クレ　（笑いながら）背中を見る方が面を見るより氣持がいいね

クレン　セン、ドニイを占領してもセン、ミシエルは占領出來るもんか

第十三場

クレ　（デスに）萬歳！おめでたう！

デス　聖ミカエル萬歳！

騎士皆　（劍をぬき）萬歳！

デス　諸君、そこを少し開けてくれ給へ

（騎士たち片方に列ぶ、中央をシイモア縛られて他の捕虜と共に入

り來る)

ペイ　(快よさゝうに、シイに向い)閣下の御來臨を忝くしまして光榮に存じます

(デス。ラモ其他二、三の騎士と談る、シイは中央)

クレ　(シイを左手の壁の方に引連れて)こつちの高い所から陸地をごらんなさい、あの黑い岩がトムブレースですよ

シイ　貴樣、おれを侮辱するな

クレン　あなたの失望は尊敬します、でもあんな素適な景色を見ないのは惜しいではありませんか

ペイン　ごゆるりとあの島をごらんなさいまし

デス　(近づく)今朝まではイギリス領でしたが、もう名前は變りましたね

クレン　左の方がセリユンヌ、右の方がクエノン

シイ　わしらの領地だ、いつまでも動くものか

デス　虫のよすぎる夢さ、海岸に死んでるイギリス兵なら何時までも動かないでせう、城壁の下で討死した二千の兵卒はイギリスの守りでせう

クレ　(笑ひながら)イギリスでは今度こんな言葉が流行るでせうな——砂濱の露と消えなんて——

シイ　あの卑怯なボウヴアールだけは呪つてやる、何處にゐるのか

ペイ　討死してしまつた

シイ　ボウヴアールが?

デス　勇敢な兵士、祖國に忠義の……

シイ　もしも

(ジエラを見て默つてししまふ)

第十四場

ジエラ　(教會の入口より來る、院長、支へる)あの巡禮です

シイ　誰だ

ジエラ　僕だ、素足に粗服をまとひ、頭を垂れてゐた姿はいかにもしほらしかつたが。

たうとう捕まりましたね、――隱謀をたくらむ者は默つて隱れてゐるものですよあなたは今朝ファニルで巡禮の杖の代りに斧をふり廻してゐました、こつちは待つてゐたのです、あなたはしやべり過ぎました、私は皆聞いてしまつたのです

シイ　（低聲で）やあしまつた

ジエラ　あなたは酷い言葉でジャンダルクを罵りました、今度はジャンが復讐したんです

騎士　萬歲々歲

（ミシエ旗を持ちジエの側に並ぶ）

シイ　（憤激する）あの旗だ、戰爭の眞最中おれの眼を眩ましたのは、あつちへ持つて行つてしまへ

デス　ジャンダルクはもう薪の上にはゐやしない、イギリス兵を押拂つてこゝを救つたのもジャンダルクだ、あれはフランスの聖女だ

シイ　（皮肉さうに）そつちにジャンダルクがゐればこつちにはペットフォートがゐる、どつちが強いかいまに解るだらう

ジエラ　（ゆつくりと）二年經たないうちにペットフォートは死にませうよ

シイ　（心騷ぐ）なに、何だと

ジエラ　三年經たないうちにパリイはフランスのものになります、聖ミカエルとジャンダルクによつて

シイ　巴里がだつて！誰がそんなことを云つたのだ

ジエラ　誰でもいゝ、私は知つてるのです、そうして七年のうちにデストビル親子がロード、スケールスをグランビルから迫拂ふでせう、二十年のうちにイギリスはカレイを殘して、フラスで持つてる土地を皆、なくしてしまふでせう、……ジャンダルクのお蔭で

シイ　默れ、だまれ

ジエラ　（氣を失いかける、院、に）修院へ――修院へ――あの旗の下で

ミシエ　（手を取る）もう死ぬのだ

（院、ラモ。ジエラールを支へ右手に行く、ミシエ旗を持つて後から行く）

デス　（劒を抜いて）敬禮！殉教者だ

第十五場

シイ　（デスに）可哀想に思つたら殺してくれ

デス　シイモア、君は行つてもいゝ、繩もかけまい、償金も取るまい、フランス人は二十年の恨をかうして復讐するのだ

（鎖を外してやる）

クレ　二十年間の攻撃、陰謀もその効なくセン、ミシエルハ矢張りフランス領だ

デス　ペッドフォードと國王の所へ行つて云へ、フランスはキリストの領地だつて……キリストのお許しがなければどうすることも出來ないのだ、天主は時々フランスを罰する爲めに敵といふ鞭を振ふこともあるが充分だと思ふ頃には

ジャンダルクのやうな者を呼んで我われを救つて下さるのだ、そうしてフランスは一層、強い大きな國となつて生れ替つて來るのだ、キリストはフランス人を愛してゐなさるのだ

シイ　いつかまた戰場で遭はう

デス　それこそ、こつちの望む所だ――さう、また、グランピルでな

（シイモア、英兵出る、デストル中央に來たり劍を高くあげて）

キリスト萬歳――聖ミカエル萬歳――ジャンダルク萬歳！

皆々　萬歳、萬歳、萬歳！

（幕）

501
202

大正十年十月廿九日印刷
大正十年十一月一日發行

定價金五拾錢

複製不許

編輯兼發行者　東京市小石川區關口臺町十九番地　教學研鑽和佛協會

和佛協會代表者　東京市小石川區關口臺町十九番地　牧野泰藏

印刷者　東京市日本橋區龜島町一丁目四十番地　岸岩二

印刷所　東京市日本橋區龜島町一丁目四十番地　吉村印刷所

129/16
八分

501
202

終